

昨年に引き続き、今年は10月10日にピエール・アモイヤル先生のヴァイオリンのマスタークラスが開講されました。

午前中は院1年生と学部3年生がバッハのパルティータとソナタ、メンデルスゾーンのコンチェルトで受講しました。とてもよく準備された演奏で先生も喜んでいらっしゃいました。技術的な指導もありましたが、バッハ、メンデルスゾーンを作曲家の人生などもよく調べた上で楽譜を読み込むようにとのこと。特にメンデルスゾーンでは聴き慣れている、習慣で弾かれている事は必ずしも正しい事ではないと強調されていました。



午後は学部2年生と院1、2年生2人の3名がシベリウス、チャイコフスキー、ショスタコーヴィッチのコンチェルトで受講しました。それぞれの良いところや、少し足りないところを具体的におっしゃられ、学生達もわかりやすかったと思います。

またシベリウスでは各楽章の性格をフィンランドの自然や歴史も含めて話されたり、チャイコフスキーでは先生の師であるハイフェッツがさらにその師のアウアーから教えられた、1楽章のテンポの指示はどのような状況で書かれたのか、本当はテンポの変化は望んでいなかった、というお話し、ショスタコーヴィッチの単音からなるメロディーはロシア正教のミサでの主教の祈りの歌であるというお話しなど、あたり前ではありますが音楽はその作曲家の人生の結晶ですから、その背景、生きた国の文化や時代の情勢などにもっと興味を持って知る事が大切だと強く思った一日でした。

